

健常有歯顎者、片側および両側臼歯部欠損患者における咀嚼能力と偏咀嚼に関する研究

岩下, 隼人

<https://hdl.handle.net/2324/1441148>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



論文審査の結果の要旨

健常有歯顎者、片側および両側臼歯部欠損者における 咀嚼能力と偏咀嚼に関する研究

日常臨床において、臼歯部欠損患者に対し欠損補綴治療が行われているが、咀嚼能力の回復には、偏咀嚼の改善も考慮する必要がある。そこで本研究は、健常有歯顎者と臼歯部欠損患者を対象に、咀嚼能力および偏咀嚼の程度を調査し、それらの様相および欠損状態による相違について解析を行い、以下の結果を得ている。

まず、グミゼリーを用いた咀嚼能力評価法について、健常有歯顎者20名（男性10名、女性10名、平均年齢 27.3 ± 2.1 歳）を対象に日間変動を検索したところ、日間変動は小さく客観的かつ再現性高く咀嚼能力の測定を行い得る方法であることを確認した。次に、そのグミゼリーにチューインガム、ピーナッツを加え、咀嚼能力と偏咀嚼の程度を比較解析した。その結果、健常有歯顎者の自由咀嚼、右側および左側指定咀嚼時のグルコース溶出量の平均値に統計学的な有意差はなかった。また、偏咀嚼の程度を示す偏咀嚼指数の平均値はチューインガム、グミゼリー、ピーナッツの順に大きくなっており、チューインガムとピーナッツ間で有意差が認められた。これらの結果から、健常有歯顎者は片側のみの咀嚼でも咀嚼側を指定しない自由咀嚼と同等の咀嚼能力を呈すること、また硬く粉碎性を有する食品は偏咀嚼を呈しやすいことが示唆された。次に、片側臼歯部欠損患者30名（男性：11名、女性：19名、平均年齢： 63.8 ± 10.1 歳）、両側臼歯部欠損患者23名（男性5名、女性18名、平均年齢 69.2 ± 7.0 歳）の咀嚼能力と偏咀嚼の程度を調べた。その結果、片側臼歯部欠損患者の自由咀嚼、非欠損側指定咀嚼に比べ欠損側指定咀嚼時のグルコース溶出量が低下しており、欠損側指定咀嚼時と自由咀嚼、非欠損側指定咀嚼間に有意差が認められた。食品毎の偏咀嚼指数間には有意差はなかった。両側臼歯部欠損患者の自由咀嚼、右側指定咀嚼、左側指定咀嚼時のグルコース溶出量には有意差は認められなかった。また、偏咀嚼指数についてはチューインガム、グミゼリー、ピーナッツ間で有意差はなかった。被験者群間の比較では、片側臼歯部欠損患者の咀嚼能力は健常有歯顎者との間に有意差はなかったが、偏咀嚼の程度は健常有歯顎者と比べ、有意に高かった。両側臼歯部欠損患者の咀嚼能力と偏咀嚼の程度は健常有歯顎者との間に有意差があることを見出している。これらの結果から、片側臼歯部欠損患者では明らかな咀嚼能力の低下は認められないものの、偏咀嚼の程度は増加すること、両側臼歯部欠損患者では、明らかな咀嚼能力の低下と偏咀嚼の程度が増加することを見出している。

以上、本研究は、客観的咀嚼能力測定法としてグミゼリーを用いた方法の有用性を明らかにするとともに、それらを用いた手法を基盤に、臼歯部欠損により偏咀嚼が生じる可能性を示唆する新たな知見を得ており、欠損補綴治療に偏咀嚼に及ぼす影響の調査の必要性を示唆するものと評価できる。したがって、本論文は博士（歯学）の学位授与に値する。

博士學位論文審査結果の要旨及びその担当者

（ふりがな） 氏 名	いわした はやと 岩下 隼人
論文調査委員	主 査 九州大学 二ノ宮 裕三 教授
	副 査 九州大学 高橋 一郎 教授
	副 査 九州大学 牧平 清超 准教授